

▼子どもたちに獲得させたい「概念」をめぐって

附属小学校で全学年にわたって実践されている「よつば学習」は、これまで「はばたき学習」の中で何度か参観させていただいた。附属特別支援学校と協働し子どもたち同士がコミュニケーションを深めながら、またゲストティーチャーの協力も得て、非常に「重要なこと」を学び取っているということを感じてきた。また、一つ一つの授業の中で目指されていることは、我々も立ち止まって考えさせられるような本質的なもの、という感覚もある。その「重要なこと」が、総合的な学習の時間を通じて身につけてほしい「概念」ということになるだろう。この「概念」をめぐって、本実践を通じて多くのことを学ばせていただいた。

○子どもたちに獲得させたい「概念」の焦点化

「はばたき学習」は他の教科・領域と違って、長い期間、時間数から単元が成り立っている。その長い時間を通じて子どもたちに学び取ってもらいたい「概念」とは何か。そのことについて、授業設計段階で明確化していたとしても、授業が展開していくにつれて、重要なポイントがさらに明確化されたり焦点化されたりしていくということを感じた。子どもの学習を予測し仮説を立てるといふ授業設計がしっかりあってこそだと考える。

その際、評価について検討することが「概念」の焦点化につながると考える。本時においての評価は、指導案では次のように書かれている。「楽しさの感じ方は人によってそれぞれ違うということを根拠にして、共に楽しむためにできることを見直している。(発言・シート)」。このように評価の視点を明確化することを通じて、子どもたちに獲得してもらいたい概念が明確になると考えられる。

○「概念」に出会わせ、自分のものにしてもらうことの難しさ

重要な概念を子どもたちに出会わせ、その意義を感じてもらい、自分のものにしてもらうというのは簡単なことではない。子どもたちが多様な関心を持って取り組んでいるなかで、教師の指導性が全面に出過ぎてはいけなく、正解があつての答え合わせのようになってはいけない。でも、教師の側には意図があり想いがある。この実践を通じて、子どもたちにぜひともつかんでもらいたいものがある。そのバランスをどうとるか先生方の持っている「わざ」であり、授業時間の中ですぐには伝わらなかったとしても、子どもたちは省察を通じていずれ必ず気づくのだろうと感じた。

▼本時の「リフレクション・イン・アクション」

一方、授業研究という意味では、単元及び本時の設計を重ねていくと同時に、本時を公開することによって、その時間における教師の「リフレクション・イン・アクション」についても協議することは意義があると考えられる。授業の中での授業者の言動に焦点を当て、その言動に至る認知、思考、判断、意思決定について協議したり、その言動が次の授業展開にどのように結びついていたかといった点も時間が許せば協議したい。

この「リフレクション・イン・アクション」についての関心も、上記の獲得してほしい「概念」とつながっている。概念の獲得に向けて、教師はどのようにそこに焦点化していったのか、そこに至るまでに授業状況をどのように認知したのか、机間をまわりながらどのような情報を得たのか、などなど、授業者にしかわからない(あるいは授業者自身も無意識のことも)点についても、協議することに意義があると考えられる。